

許されざるプロポーズ

目次

許されざるプロポーズ

5

意地っばりのビーナス

265

許されざるプロポーズ

「それでは……明日からよろしくお願いします！」

篠原莉奈は座り心地のいいソファから立ち上がり、面接してくれた男に深々と頭を下げた。そして、顔を上げると、背中の中ほどまである長い髪をさっと直す。

ここは銀座のキャバクラ『ロザリア』。開店前ではあるが、多くの花が飾られ、豪華な設えの店内を彩っている。ここで莉奈は明日の夜から、キャバ嬢として働くことになった。

彼女は今までこういう場所で働いたことはない。大学生の頃、ウェイトレスのバイトをしていたことはあるが、それとはまったく違う。果たして自分にできる仕事なのかどうか、不安が募る。自分はまだ二十四歳で、そんな弱気なことではいけないと思うのに。

女子大を出て、父が経営する会社に就職したのは二年前。その二年の間に、莉奈はなんのキャリアも積んでこなかった。社長令嬢ということで、普通の社員と同じようには扱ってもらえなかったし、まわされるのは、なんの責任も負わなくていい仕事ばかり。電話番号や雑用係でしかなかった。そんな簡単な仕事をこなすだけの日々、莉奈は少しの喜びも感じられなかった。

そのぬるま湯に二年も浸っているべきではなかった。会社は今や巨大企業の傘下に置かれ、父は経営権を失い、莉奈は不要な人員として解雇された。屈辱的ではあったが、自分が会社にとって必要な存在だということは判っている。子供の頃からいつもそうだった。なにかひとつでもやり遂げることがあるならいい。けれども、彼女にはなにもなかった。

時々、自分は人並みのことができない人間なのではないかと思うことがある。不器用で、引っ込み思案で、極端に自信がない。とはいえ、それを表に出すことはほとんどない。そうするには、あまりにもプライドが高すぎる。莉奈はそんな自分がたまらなく嫌だった。

ともあれ、そんな自分でも働かなくては生きていけない。だが、資格も持たない莉奈は再就職に行き詰まっていた。そうするうちに、どうしてもある程度のまとまった金が必要になった。そこで、安易な道かもしれないが、時給四千円に指名料がプラスされるキャバ嬢となることを考えたのだ。

莉奈は店を出て、ため息をついた。判断を誤ったかもしれない。男性客の相手をするなんて、果たして自分にできるだろうか。

とはいえ、悩んでいても仕方がない。とにかく明日から仕事をする。そして、お金を稼がなくてはいけない。

莉奈はそれから電車に乗り、まっすぐ家に帰った。最寄りの駅から出たところで、雨が降っているのに気づいて、またもやため息をつく。

まったく、ついていない。このところずっとそうだ。なにもかも彼女の思うとおりにならず、事態は悪いほうへと向かってしまう。

幸い雨は小降りだった。コンビニで傘を買うほどでもない。莉奈は足早に家へと向かった。もう日は暮れかけていたが、この分なら、完全に暗くなるまでには帰り着けそうだった。

彼女の住む家は、いわゆる高級住宅地にあった。彼女の父は見栄っ張りで、わざわざこんな地価の高い場所に家を建てた。もちろん、これには利点があった。金を借りようとするときに、いい担保になる。父は自分の会社を立て直そうとして、無謀な借金をしたので。

そして、その借金を返せなくなったことから、家族は窮地に立たされた。

本来なら銀行に不動産を差し押さえられるところのだが、父はなんと会社を乗っ取った相手に家と土地を売却した。差し押さえられ、競売にかけられたら借金が残る可能性がある。それを避けるためだったとはいえ、莉奈はそれを知ったとき、悔しくてならなかった。

あの男に、会社ばかりか生まれ育った家まで奪われてしまうなんて……

早急に家を明け渡せという通告が彼の弁護士から届いている。それは仕方ないことだと思いつつも、家族は身動きが取れないでいた。父は自分の会社を失った後、脳梗塞で倒れた。今は退院したものの、まだ左半身に麻痺が残っている。母は莉奈以上のお嬢様育ちで、まったく頼りにならない。ほかに頼れる親戚もなく、家族三人で暮らせる場所を用意できていなかった。これでは家を出ることなどできるはずがない。

せめて、あと少しの猶予が欲しい。父の身体がもう少しよくなるまで。彼女がお金を稼いで、新しい生活の基盤ができるまで。

家が見えてきた。門扉を開けようとしたところで、路肩に停まっているピカピカの黒い高級車が視界に入り、彼女はぎよっとして息をとめた。

いや、正確には、車を見て驚いたわけではない。車の後部座席から降りてきた男性を見た途端、足が震えて、その場でうずくまりそうになった。

見るからに仕立てのいいブランドのスーツで長身を包んでいるその男の名は、藤代高史。莉奈の最も憎むべき男だ。父の会社を買収してすべてを支配下に置き、莉奈を解雇した。それだけならまだしも、家を奪い、彼は莉奈とその家族を苦しめようとしている。

彼の端正な顔が憎らしい。全身から放つ威圧感と厳しい表情、そして言い知れぬ感情をたたえた炎のような瞳もすべてが。

五年前、彼が莉奈にいつも甘く微笑みかけていたことが、今となっては信じられない。

彼はまだティーンだった莉奈が思っていたような人間ではなかった。愚かにも、彼を信じかけ、この身まで捧げようとした。幸い彼の本性が判って、別れられたからよかったが。

莉奈は彼に負けじと睨み返した。

「お忙しいあなたが、こんなところになんの用事かしらね」

皮肉たつぷりに声をかける。彼の顔を直接見たのは、五年ぶりだった。父の会社を奪ったときも、莉奈を解雇したときも姿を現さなかった。今になって、こうして現れるとは、どういふつもりだろう。「君に警告しておくことがあってね」

彼の深みのある低い声は昔のままだった。記憶が呼び戻されそうになり、莉奈は慌ててそれを心

の隅に押し込んだ。少なくとも、今は甘い思い出など邪魔なだけだ。彼は莉奈を傷つけ、惨めな思いをさせようとしている。だから、今というときを狙って、ここに来たのだ。それが五年前、彼を振った莉奈に対する復讐に違いない。

「そのために、わざわざここに来たっていうの？」

高史は髪についた小さな雨粒を払い、嘲るように笑った。

「僕がまだ君に関心があるとでも？」

そんなことは思わない。だが、そんなふうに言われて、莉奈の心の弱い部分は傷ついていた。彼に傷つけられることは、もうないと思っていたのに。

「いいえ、とんでもない。でも……警告ならすでに受け取っているわ。一刻も早く立ち退きしるってことでしょうか？」

「そうだ。この家はもう僕のものだ。いつまでも居座ってもらっては困る。一週間以内に立ち退かなければ、裁判所に申し立てて強制執行をもらうまでだ」

莉奈の顔から血の気が引いた。今、父親をそんな目に遭わせるわけにはいかない。退院したとはいえ、安静が必要なのだ。

「そんな……！ あなたは血も涙もないの？ 父はあなたのせいで病気になったというのに……！」

「僕のせい？ それはお門違いだ。君のお父さんはビジネスで負けた。無謀な借金までして……。」

僕はそれを助けてやったのに、お父さんの病気まで僕のせいにするつもりか？

これが助けたことになるのだろうか。逆に苦しめているだけだ。しかし、冷静に考えれば、彼が買おうと言い出さなければ、競売にかけられていた。どのみち家は奪われていたに違いない。

「あなたが……うちの会社を乗っ取ろうとしなければ、こんなことにはならなかった」

「残念だが、もう『うちの会社』じゃない。僕の会社だ。乗っ取りと君は言うが、真つ当な手段で経営権を手に入れただけだ。君のお父さんの経営は古いやり方で、それが原因で会社を潰した。僕はその会社を救ってやっただけだ。元の経営者とその娘だけを追い出してね」

高史は満足そうな笑みを浮かべて、莉奈の顔をわざとらしく見つめた。その表情に、彼の裏の顔が見えたような気がする。彼は莉奈を苦しめるのが楽しくて仕方がないのだ。

「あなたは私に復讐したいだけなのよ。だから、私からなにもかも奪おうとする……」

「そのとおりだよ、莉奈」

突然、昔のように名前を呼ばれて、莉奈は言葉が出なくなった。五年前の甘い記憶が押し寄せてきて、立っているのがやっとの状態になる。

そんな莉奈を見つめているうちに、高史の表情は硬く強張った。

「僕は自分が傷つけられたことを絶対に忘れない。だから、今度は君をとことん傷つけてやる。容赦はしない。覚悟しておくんだな」

高史は待たせていた運転手に声をかけ、車の後部座席のドアを開けて乗り込もうとした。莉奈は慌てて彼の腕に手をかける。

「待って！ 父は病後で身体が弱っているの。安静にしてなくちゃいけないのよ。それに……引越しのお金がないの。もう少しだけ……立ち退き期限を延ばして」

こんなことを頼むなんて、惨め（なげ）でならなかった。けれども、仕方がない。家族を守るために、どんなに情けなくても彼にすがるしかなかった。

「僕は別に君の家の中にあるものの所有権まで奪ったわけじゃない。家具でもなんでも売れるものはあるだろう？」

「じゃあ、売れるまで待って！ お願（ねが）い！」

高史は馬鹿にしたように肩をすくめて、莉奈の手を振り払った。

「君の願（ねが）いかなえてやる義理はないな」

彼はさっとシートに座ると、ドアを閉めた。莉奈は窓に手をかけて、拳（こぶし）で叩く。このまま彼を行かせてしまったら、もう二度と会えないだろう。彼にこちらの窮状（きゆうじょう）を訴える機（き）会は失われてしまう。強制立ち退きをさせられたら、自分達はどこに行けばいいのだろう。

車が走り出す。莉奈も走り出して追いかけた。なんとか追いつかなくては。彼に必死で頼み込んで、期限を延ばしてもらうしかない。

だが、無情にもヒールが折れて、莉奈は道路に倒れた。アスファルトに膝（ひざ）をひどく打ちつけてしまった。雨に濡れた道路に倒れたため、クリーム色のスーツと掌（てのひら）が汚れ、莉奈は今が人生最悪の瞬間だと思った。涙（なみだ）が零（こぼ）れてきて、頬を濡らす。

「君のそんな惨めな姿を見るのは最高に嬉しいよ」

顔を上げると、車が停まっていて、高史がこちらに歩いてくる。彼をとめることができたのだから

目的は果たしたはずなのに、こんな姿を見られて、悔しくてならない。けれども、今は彼の慈悲（じひ）にすがるしかない。

「ほら」

高史に手を差し出されて、躊躇（ためら）いながらもその手を取る。温かい手の感触に、莉奈は湧き上がる思慕の情を必死で抑えた。

彼のことは間違（まちが）いだったのだ。五年前に終わったことだ。

莉奈は高史に支えられながら、なんとか立ち上がった。ストックキングは伝線し、膝から血が出ている。

高史は莉奈を支えたまま車に歩いていこうとする。

「どこに行くの？」

「君は家のことで僕と話し合いたいんだらう？ それなら、話し合うにふさわしい場所に行くまでだ」

それは一体どこなのだろう。彼の会社のオフィスなのだろうか。こんな姿を社員に見られるなんて、惨めすぎる。しかし、今の莉奈は高史に逆らえない。

莉奈は彼と共に車の後部座席に押し込まれる。彼は運転手に一言だけ告げた。

「行ってくれ」

車は滑るように走り出した。莉奈は膝の痛みを耐えながらも、隣に座る高史に目を走らせる。彼はなにを考えているのか判（わか）らない表情で、莉奈を見つめ返している。

いつそ、五年前に出会わなければよかったのに……  
莉奈はそう思わずにはいられなかった。

2

五年前、莉奈は十九歳の女子大生だった。まさしく箱入りのお嬢様だったと思う。あまりにも世間知らずなので、彼女は友人達と同じようになにかバイトを始めることにした。しばらくバイト先を探してみても、大学の近くにある小さなカフェレストランでウェイトレスをすることに決めた。

そして、そこに客として現れたのが高史だった。  
というより、高史は莉奈がバイトを始める前からその常連客で、オーナーでもあるマスターと親しかつた。初めて会ったとき、彼は店に入ってくるなり、カウンターの席につき、マスターと談笑を始めたのだ。莉奈は一瞬、自分の仕事も忘れて、彼の姿に見入ってしまった。

長身でスマート。それだけでなく、歩き方や動作がしなやかで、とても人目を引く。おまけに、顔も整っていて、莉奈は自分の理想の男性に出会ったことに衝撃を受けた。まさに一目惚れだったと言ってもいい。

そんな莉奈を見て、マスターが声をかけてくる。

「莉奈ちゃん、見とれてないで仕事をする」

「あ……はい！」

慌てて莉奈は彼にお冷とメニューを出した。彼は笑みを浮かべながら、莉奈を見つめる。莉奈は自分の顔が赤くなるのが判<sup>わか</sup>った。

「こんな可愛い娘、いつ雇ったんだ？」

「一週間前だ。……莉奈ちゃん、こんな男に惚れちゃダメだよ。こいつはひどい男なんだからな」  
マスターは笑っているから、本気ではないはずだ。莉奈は視線を外そうとするが、どうしても彼から目が離せない。彼のほうは優しく笑っていて、その笑顔がまたとても素敵だった。

彼の名前と年齢、そして会社社長だということはその日のうちに知った。莉奈より十二歳も年上だったが、最初見たときは、まさか三十歳を越えているとは思わなかった。もちろん、彼女よりはるかに大人であることは、すぐに判<sup>わか</sup>ったが。

それから、彼は頻繁に店に顔を出すようになり、いつしか莉奈とも話すようになっていた。

「莉奈ちゃん、バイトが休みの日に二人だけで遊びにいかない？」

ある日、高史に小さな声でデートに誘われて、莉奈は舞い上がる気持ちを隠せなかった。

「行きますー！」

すぐに返事をしてしまって、高史に笑われた。こんなことでは、彼に子供のように思われてしまう。デートの日、莉奈は精一杯おしゃれをしたが、それでもひとまわりも歳が離れていると、自分が不釣り合いではないのかと不安で仕方がなかった。

高史は立派な大人の男性だ。しかも、並みの男性ではない。見た目も素晴らしく、中身も同様だ。



しかも、会社社長というステータスもある。乗っている車だって高級車だ。きっと何人もの女性と付き合ってきたはずだし、そんな男性から見たら、自分はきつとただの子供でしかないだろう。

そうだ。彼は自分に夢中になっている若い女の子が可哀想になって、デートに誘ってくれたのかもしれない。

そんなふうにも思ってしまうのは、莉奈が自分に自信が持てないせいだった。

箱入り娘で、中学から女子校に通っていて、今も女子大に在学しているから男性に免疫がない。それに、支配的な父親にいつも『おまえはなにをやらせても中途半端だ』と口ぐせのように言われていた。事実、子供の頃からいろんな習い事をさせられたが、一度としてちゃんと続けられなかった。莉奈は自分が不器用なことがよく判っていた。

こんな自分を彼が本気で好きになるはずがない。このデートは彼にとつて、ただの気まぐれだ。もしくは、遊びのようなものだろう。彼にはもつと美しい落ち着いた女性がふさわしい。

だが、彼とのデートはとても楽しかった。ただの遊びでもいい。大好きな彼と一緒にいるだけで嬉しかったし、彼が優しくエスコートしてくれることに幸せを感じた。

「莉奈って呼んでもいいかな？」

二度目のデートで、彼はそう尋ねた。莉奈はそんなふうには呼ばれると、本物の恋人同士になったような気がして、嬉しくてたまらなかった。

「僕のことば高史と呼んでくれ」

それまで、彼のことは『藤代さん』と呼んでいた。

「……高史さん？」

彼は笑みを浮かべながら首を横に振った。

「違うよ。高史、だ」

つまり、呼び捨てにしていると言ってくれている。莉奈は天にも昇る気持ちだった。

「高史……」

彼は優しく微笑んだ。

「莉奈」

優しい呼びかけに、莉奈は頬を染めた。胸がときめいて仕方がない。彼は莉奈のことを恋人だと思っているのだろうか。とても信じられないが、下の名前で呼び合うなんて、特別な関係のようだ。初めてキスしたのは、三度目のデートだった。

夕食を共にして、それから車で家まで送ってもらったときのことだった。車から降りようとする彼女を引きとめ、そつと唇を重ねてきた。ほんの一瞬の触れ合いだったが、莉奈にとっては身体が熱くなるような体験だった。

だが、何度かデートしても、彼はキスより先のことはしてこなかった。理由は莉奈が若すぎるから。確かに歳の差は大きい。けれども、彼女はあまりに高史に夢中になりすぎていたから、もつと先に進みたかった。それなのに、彼の一人暮らしのマンションにも連れていってもらえなかったのだ。彼は自分の欲望を抑える自信がないからだと言いつつ、莉奈は心の底では少し疑っていた。キスより先に進まないのは、本気で好きではないせいかもしれない、と。

本当に好きなら身体ごと奪いたくなるはずだと、莉奈は思っていた。もちろん、それは恋愛小説で得た知識で、本当のところは判らない。しかし、彼女のほうは彼に抱かれたかった。二人は本物の恋人同士だと、証明したかったのだ。

そんなとき、莉奈は父に書斎へ来るようにと呼びつけられた。支配的な父は娘に恋人ができたということが、すぐに判つたらしい。父は高史について、すっかり調べ上げていた。

「結論から言うと、おまえは騙されている」

ソファにどっしりと腰かけた父は、いつもの断固とした口調で言いきった。向かい合わせに置かれたソファに座っていた莉奈は、いきなりそんなことを言われて愕然とした。

「そんな……！」

彼が本気ではないかもしれないと疑ったことはあるが、騙されているとまでは思わない。なぜなら、彼は莉奈を大事にしてくれている。少なくとも、身体が目当てでないことだけは確かだ。

「あいつは恐らく、父親の指示で動いているんだろう。おまえにちよっかいをかけて、私を揺さぶっているつもりなんだ」

「父親って……？ どういうことなの？ 揺さぶりって？」

父の言葉は、莉奈には判らないビジネスの匂いがした。嫌な予感がある。てっきり父がいつものように莉奈の行動に口出しして、舞い上がった恋に水を差すつもりだと思ったのに。

まさか、高史が騙したりするはずがない。彼は優しい人だ。

そう思いながらも、どこか信じきれない自分がいた。信じたいのに、信じられない。もしかしたら、間違っているのは自分のほうではないかと思ってしまうのだ。

「あいつの会社がなにを取り扱っているのか、知らないわけでもないだろう？」

莉奈はおらずと頷いた。もちろん、それくらいは聞いていた。父の会社と同じく不動産を扱っている。それも、父と張り合うような大きな会社らしい。

「ライバル関係にあるけど、私と付き合うことはビジネスとは別だって……」

「おめでたい娘だな。それをあっさり信じたのか？」

父は蔑むような口調で吐き捨てた。莉奈の顔から血の気が引く。

嘘よ……。嘘よ、そんなの。

「か、彼は私を大事にしてくれてるわ。……その……彼のマンションだって行ったことがないのよ。私が若すぎるからって……」

「おまえのような小娘相手じゃ、その気になれないだけだろう」  
父はあっさりと莉奈の最後の砦を崩した。

けれども、それはどこかで莉奈自身が想像していたことと同じだった。彼はその気になれないのだ。キスしかない恋人同士なんて、今時いるわけがない。しかも、彼は高校生などではなく、立派な大人だ。いや、高校生だってもっと積極的だろう。

「彼は……どうして私に近づいたの？ ビジネスで勝ちたいから？」

そんなことのために、私を利用しようとしたの？

だが、莉奈がどうなろうと、父は大して気にかけないだろう。父にとって大事なのは娘ではなく、自分の仕事とプライドだけだ。一人娘でありながら、ずっとないがしろにされてきたし、たまに口を出したかと思うと、今度は徹底的に莉奈を思うとおりにしなければ気が済まなかった。母はそんな二人の間に立って、おろおろするばかりで、彼女の味方もしてくれなかった。

「昔、あいつの父親の婚約者を奪ってやったんだ。向こうは資産家の令嬢と結婚して、金銭的な援助を受け、ビジネスを拡大しようとしていた。それを阻止するために、彼女を口説き落として駆け落ちした」

「それって……まさかお母さんのこと？」

「そうだ。結局あいつは家から勘当されて、到底援助どころじゃなかったがな。しかも、結婚してから長いこと子供ができず、やっと生まれたかと思ったら、こんな出来損ないの娘だけなんて……とんだ貧乏くじを引いたものだ」

父のひどい言葉に、莉奈は言葉が出なかった。出来損ないの娘だと思われていることは判っていた。しかし、それを母のせいにするなんて、あまりにひどい。父は横暴な人間だけど、母を愛していたから駆け落ちしたのだと、ずっと思っていたのに。実家から勘当されても、母は幸せなのだ、莉奈は思い込んでいた。

だが、そうではなかったのだ。莉奈が生まれるまでの長い間、母はどんな気持ちでいたのだろう。きつと駆け落ちしたことを後悔したに違いない。

「向こうはすぐに別の相手と結婚して、一年後に息子ができた。一人息子だが、あいつが病気で引

退してからも、立派に会社を経営している」

一瞬、父の声に羨ましそうな響きが混じった。確かに高史のような息子を持てば、父は満足だっただろう。

「きつとあいつは息子に命じて、おまえを誘惑したんだ。あのとときの復讐だ。おまえを弄んで捨てれば、私が動揺して、経営に隙ができるでも思ったんだろう。そうはいかない。こっちがうわてだということを思い知らせてやる！」

莉奈は自分が復讐の単なるコマに使われたことが信じられなかった。父に揺さぶりをかけるだけの安い存在だったなんて……。せめて、もう少し意味のあるものだと思いたかった。

「でも……偶然だったのよ、会ったのは。私がバイトしていたレストランの常連で……マスターとも親しかつたから、私がバイトを始めるずっと前からあの店に入りにしていたのは確かよ」

「確かに最初は偶然だったかもしれない。だが、おまえが名乗れば、すぐに私の娘だということは判る。すぐには判らなくても、どうせああいふ野心的な男は相手の素性くらい調べるに違いない」

つまり、高史は父と同類の男だということだろうか。父も母を奪うときには、同じように優しく接したのかもしれない。そうして、母を安心させ、騙したのだ。

「おまえに……いいものを見せてやろう」

父はわざとゆっくりと言うと立ち上がり、机の引き出しから一枚の写真を見せた。それに写っているのは、高史と見知らぬ美しい女性だった。高史にふさわしい年頃の落ち着いた大人の女性だ。

二人は楽しそうにどこかで食事をしている。隠し撮りされたものだろう。つまり、父が高史の調査

を始めてからのもので、ここ最近の写真ということだ。

美人と食事をしただけでは裏切りにはならない。仕事の相手という可能性もある。

「この美人は彼の婚約者だ」

「嘘……」

莉奈は息が上手く吸えなくなり喘いだ。その様子を、父は冷やかに見つめている。

「嘘だと思いたい気持ちは判る。だが、おまえは甘い言葉で騙されているだけだ。目を覚ませ。おまえに手を出さないのがいい証拠じゃないか。こんな美人が婚約者なら、いくらおまえを騙すのが目的でも、わざわざベッドに連れていく気がしないのは判る」

莉奈の目からとうとう涙が流れ出す。父の言葉を認めたくなかった。しかし一方で、それが真実だという気もする。胸が張り裂けそう、苦しくてたまらない。

「つらいだろうが、現実を直視することだ。苦しめられたら、苦しめ返せ。私があいつに復讐する方法を教えてやろう」

「復讐なんて……」

そんなことは考えつかなかった。傷つけられたことは悔しいし、悲しい。けれども、高史に復讐したいなどは、まったく思わなかった。

「簡単なことだ。あいつはおまえを捨てようとするだろう。だから、捨てられる前に、おまえから捨ててやれ。それで、あいつのプライドは傷つく。小さな復讐だから、おまえだって罪悪感を抱かずに済む」

確かにそれは小さな復讐だ。傷つくのは、ほんの少しのプライドだけ。どうせ高史は本気ではなかったのだから。

莉奈はそれでも父の言葉を全面的に信じたわけではなかった。

その夜、彼女は一人で高史のマンションに向かった。だが、部屋番号を知っているのに、訪ねていくだけの勇気が持てなかった。本当のことが知りたいと思うのに、醜い真実を知るのが怖い。彼がそんなことはないかと否定しても、莉奈はそれを信じることができるだろうか。騙されているだけかもしれないと思ってしまうだろう。一度時かかれた疑惑の種は、彼と付き合う限り消えてはいかない。マンションの出入り口でさんざん迷った後、莉奈はもう帰ろうと思った。どうしても彼と対峙する勇気が持てない。しばらく歩いて、また気が変わり、マンションに戻ろうとした。

そのときだった。高史がああの写真の女性と一緒にマンションから出てきたのを見たのは。

奈落の底に落とされた気分だった。足元から崩れ落ちそうになったが、なんとか気を取り直して二人から見えない位置に隠れた。二人はとても親しそうに見えた。婚約者かどうかは判らないが、恋人同士に見える。少なくとも、莉奈と一緒にいるときより、彼はずっとリラックスしているようだった。

彼は莉奈を部屋には入れなかったのに……

彼女は招待するのだ。それだけ、二人の仲が高史と莉奈の仲より進展しているという証拠だろう。

私は最初から恋人でもなんでもなかったんだわ……

胸が張り裂けそうだった。だが、悲しみより、逆に怒りが湧いてきた。初めて恋をして、初めてデートをした。キスも初めてだと、彼には判<sup>わか</sup>っていただろう。それなのに、なにも知らない子供のような自分に、こんな仕打ちを平気でしたのだ。絶対<sup>ぜったい</sup>に許せない！

莉奈は二人のうしろ姿を見送った。裏切られた気持ちを晴らすには、父が提案したとおりに復讐するしかない。そうしなければ、卑劣な彼に恋していた自分の愚<sup>おろ</sup>かさをつまでも引きずることになってしまう。

翌日の夜、莉奈が自分の部屋にいるとき、高史から携帯に電話がかかってきた。

「莉奈、明日はバイト休みだろう？ どこに行く？」

いつもどおりの優しい声に、莉奈は眩<sup>めまい</sup>暈がした。婚約者と二人でいた高史の姿を思い出したからだ。二人はベッドで抱き合った後だったのだろうか。そんなことを想像してしまう自分が嫌だった。今でもまだ嫉妬しているなんて、馬鹿にもほどがある。

昨夜、莉奈は一人の部屋で泣き伏した。今日は一步も外には出なかった。目が腫<sup>は</sup>れていて、どこにも行きたくなかったのだ。

「私……バイトやめたの」

「えっ……どうして？ 君はあの仕事が入っていたようだったし……いきなりやめるって、なにかあったのかい？」

なにかなければ、もちろんそんなことはしない。バイトを急にやめたら、マスターが困るだろう。

それくらいのこととは判っていたが、高史と顔を合わせるのが怖かった。

そう。復讐するにしても、相手の顔を見たら絶対に言えない。莉奈の今までの人生の中で、こんなひどいことを言ったことはなく、これが最初で最後だろう。

だが、言わなくてはならない。傷つく前に、傷つけてしまえばいい。そうすれば、高史とは二度と会わずに済む。こんなつらい気持ちには二度とならなくていいのだ。

「もう飽きたのよ。なにもかも」

莉奈は声に力を入れて、わざと高飛車な言い方をした。

「飽きたって……？」

高史は戸惑っている。捨ててやろうとした相手にこんなことを言われて、どういう気持ちなのだろう。

「だけど、もし彼が本気だったら……？」

「いや、そんなことない。」

マンションから出てきた二人の姿を思い出して、莉奈は携帯電話を握る手に力を込めた。

「もちろん、あなたにもね。もう別れましょう」

彼の息を吸う音が聞こえた。莉奈は声が震えそうになるのを必死で抑える。それができたのは、やはりあの婚約者のことが頭にあったからだ。

私は裏切られた。だから、今は復讐するときなのよ。

「元々、あなたなんか好きでもなんでもなかった。だって、ずいぶん歳が離れているでしょ？ た

だの遊びだったけど、子供っぽいキスしかしてくれないし、ブランドバッグも買ってくれない。もう、そういうデートには飽き飽きしたのよ」

電話の向こうで、高史は押し黙っている。とても怖かった。彼が怒っているのが気配で判る。けれども、もう元には戻れない。たとえ莉奈がこのまま彼と付き合っていたとしても、別れが来ることは判っている。

捨てられるのか。そうでなければ、こちらから捨てるのか。この二択しかないのだ。だったら、捨てられるまで待つていたくない。こちらから別れを突きつけたほうが、ずっといいに決まっている。

本当に……そうなの？

一瞬、迷いが生じたが、莉奈は気を取り直してダメ押しをした。

「もう次の彼を見つけたのよ。だから、あなたとは……」

「……判ったよ」

高史の冷たい声が耳に響いた。

彼のこんな声は初めて聞いた。これがきつと彼の本性に違いない。莉奈の父と同じ冷徹なビジネスマンなのだ。

涙が出てくる。けれども、必死で嗚咽が洩れないようにこらえた。

「君がそんな女だったとは知らなかった。上手く騙されていたわけだ」

騙したのはそっちじゃないの！

彼のプライドは傷ついたのでだろう。それこそ、莉奈の思うつぼだった。

「君が欲しいものをあげられなくて、悪かったね。君は演技が上手すぎたんだよ。素直で優しく清潔で……汚いものはなにない一つ知らないようなお嬢さんに見えたよ。まさかセックスと金が目当てだったとはね」

その言葉は莉奈の胸を鋭く抉った。確かにそう思わせたのは自分だが、そんな言い方をされたくない。自分はそんな女ではないからだ。

けれども、否定してなんになるだろう。どうせ彼とは別れるのだ。もう二度と会うことはないし、声を聞くこともない。

そう。二度と……

莉奈の脳裏に二人で過ごした日々がよみがえる。しかし、最後に思い浮かぶのは、昨夜の彼のマシヨンでの出来事だった。

彼には美しい婚約者がいる。私は騙されただけだ。

怒りが莉奈を駆り立てた。

「もう……切るわ。二度とかけてこないでね」

「望むところだ」

彼のほうも怒りに任せて通話を切った。莉奈は震える指で電源を切り、ベッドに投げつけた。涙が溢れてきて、前が見えない。今度は怒りの代わりに深い喪失感が訪れる。

莉奈はベッドに身を投げ、枕に顔を埋めた。悔しいのか、それとも悲しいのか。もう自分でも判

らなくなっていた。

翌日、電話番号とメールアドレスを変えた。あれほどプライドが高い男性が未練がましく連絡してくるとは思わなかった。だが、そうせずにはいられなかったのだ。

結局のところ、莉奈の心は傷ついていた。傷つく前に傷つけてやるうと思ったのに。

もう自分、男性と付き合いたくない。もちろん、どの男性も自分を騙<sup>なま</sup>そうとして近づいてくるわけではないことは判っていた。けれども、どうしても怖くなった。婚約者がいるくせに、優しい顔でキスをするような人間がいることを知ったから。

あれから五年。莉奈はまだ一度も男性と付き合い合ったことがない。

あのときのことは忘れようと努力したが、どうしても忘れられなかった。初めて好きになった人で、初めてデートした相手。しかも、初キスの相手でもある。そして、あんな傷つけられ方をして、あんな別れ方をした。そう簡単に忘れられるものではないだろう。

屈辱と胸が張り裂けそうな悲しみを味わったのに、それでも忘れられなかった。

最近になって、やっとあのときの傷が癒えたかと思っていたのに……

彼は再び莉奈の人生に現れた。

今度は最悪な形で。

高史は復讐をしようとしている。彼女に振られたことを今も根に持っているに違いない。しかし、彼女にしてみれば、あれは当然のことだった。彼のほうこそ罰を受けるべきだったのに。

高史は莉奈の頼みを聞いてくれるだろうか。

いや、聞くはずがない。彼女を苦しめるためだけに、こんな大掛かりな会社乗っ取りを仕組むような人間が、助けようとしてくれるはずがなかった。

それでも、莉奈は最後の希望を捨てることができなかった。

### 3

車は見覚えのある場所に着いた。莉奈は車から降りて、呆然とその建物を見上げる。

五年前の夜、莉奈はここに一人で来たことがある。そして、高史と婚約者と思<sup>おぼ</sup>しき美女が寄り添うように歩いていくのを、暗がり隠れて見ていたのだ。

「あなたの……マンション……」

付き合っていた頃は、一度もここに連れてきてくれなかった。だが、当然だ。彼は小娘の自分に欲望など感じていなかったのだから。

そういえば、結局、高史はあの婚約者とは結婚しなかった。新しい社長は独身だと、会社に乗っ取られた直後に社内です話題になったものだ。相手のほうが彼の本性を知って、振ったのかもしれない。それでも、彼の気が変わって、婚約を解消したのか……

どちらでもいい。自分には関係のない話だ。

「そうだ。よく判ったね。五年前は君をここに近づけなかったのに」

それでも、住所は知っていた。莉奈は彼に会いたくて、一人で何度かここに来たことがあった。もちろん招かれてもいないのに、押しかけていくような度胸はなかったが。

婚約者がいると知らされたあのときでさえ、インターフォンの部屋番号を押せなかった。とはいえ、後から考えたら押さなくて正解だった。婚約者と鉢合わせするなんて、状況としてはひどすぎる。高史は莉奈の腰に手をまわした。彼に触れられて衝撃を感じ、ビクンと身体を揺らす。

「な、なにっ？」

「ヒールが折れていて、歩きにくいだろう？」

そういえば、そうだった。確かに歩きにくい。莉奈は彼に触れられて、いまだにときめきのようなものを感じてしまう自分に嫌悪感を覚えた。

「えーと、大丈夫よ……」

「別に気にしなくていい」

こっちのほうが気になるのに。けれども、そんなことは口に出せなかった。彼のことをまだ意識しているのだと知られたくない。

私は彼に相手にもされていなかった。それを思い出すと、怒りが湧いてくる。それに、今の彼は昔の彼とは違う。彼は自分とその家族に対して復讐を企んでいる男なのだ。決して警戒心を解いてはならない。甘い恋はもう終わったのだ。たとえ彼に少くく魅力を感じる部分があったとしても、それはきつと恋とか愛じゃない。好意ですらなく、きつと欲望レベルの話だ。

彼の外見は……今でも素敵だから。それだけのことだ。

三つ並んだエレベーターの前に来ると、そのうちのひとつに彼は莉奈を伴って乗り込む。彼の部屋がペントハウスだということは知っている。さぞかし高額な部屋だろう。それなのに、彼は莉奈の家を奪おうとしている。

エレベーターは最上階へと上っていく。莉奈は急にこの密室で二人だけであることを意識しだして、思わず身体をもぞもぞと動かした。

「緊張しているのか？ 男の部屋に初めて行くわけでもないだろう？」

もちろん生まれて初めてだ。しかし、そんな恥ずかしいことは言えない。莉奈はもう二十四歳だ。十九歳のあのときと違って、少くくは男性と経験があつてもおかしくない年齢だ。だから、高史もそう決めつけている。

本当は彼と別れてから、男性とは付き合ってもいない。もちろん性体験もない。間違はなく処女なのだが、わざわざ彼にそう告げることはない。それに、処女である理由を彼に知られたくもなかった。

莉奈は彼の仕打ちによって今でも傷ついている。だが、そんなことは認めたくもない。

「私は両親の心配をしているだけよ」

「そんなふうには思えないが……」

彼は言葉を続けようとしたが、エレベーターがとまり、扉が開いたので、口を閉じた。絨毯を敷きつめたホールの先には立派なドアがあり、彼がカードをかざすとロックが解除される。玄関と廊



下は大理石の床で、その先のリビングのドアを開くと、広々とした空間が広がっていた。

「広いのね」

「君の家のほうが広いだろう」

「私の家はもつと物が多いから……」

高史の部屋はあまり物が置いてなかった。広い空間に大きな家具があるものの、少し淋しい印象だった。一言で言うと、飾り気がない。独身男性の住まいなんて、こんなものかもしれないが、果たして彼はこんな部屋で寛げるのだろうか。

私は絶対無理。

家とは安らげる場所のことだ。広くて綺麗でも、まったく落ち着けない。

だが、莉奈が落ち着けなくても、関係のない話だ。ここは高史の家で、自分の家ではない。彼がこういうインテリアがいいと思うなら、好きにすればいいのだ。

「ストッキングを脱ぐといい」

いきなり脱げと言われて、莉奈は驚いた。彼女の顔を見た高史は眉を上げ、皮肉めいた笑みを浮かべる。

「膝から血が出ている。消毒をしてやろう」

莉奈は自分の脚を見て、顔を赤らめた。ストッキングは破れ、伝線している。おまけに汚れている。こんなストッキングをいつまでもはいているより、脱いだほうがましだろう。とはいえ、まさか彼の見ている前では脱げない。

「洗面室を借りたいんだけど」

「廊下に出て、左のドアだ」

彼女は洗面室でストッキングを脱ぎ、それを丸めてバッグの中に押し込んだ。ふと、自分が無防備になったような気がしたが、仕方がない。みつともない格好で彼と話をすれば、もつと気持ちが悪くなるに決まっている。

「そこに腰かけて」

リビングに戻った莉奈は、高史に指示されて、ソファに座った。高史はまず柔らかい濡れたタオルで傷口の血と周辺の汚れを拭き取った。そして、スプレアの消毒剤をかけてくれる。

「どうもありがとう」

考えてみれば、傷口の消毒なんて自分でできることだった。こんなことをわざわざ高史にやらせてしまったと思うと、自分が恥ずかしくなってくる。彼と一緒にいると、五年前の自分に戻ってしまうのだ。つい、まだ付き合っているときのような振る舞いをしてしまう。

彼は優しい恋人ではない。冷酷な復讐者だ。

莉奈はそれを頭に刻みつけようと努力した。

「大した手間でもないさ。傷口が乾くまでコーヒードでも飲もうか」

「いいえ。それより、私の話を聞いて」

ここに来た理由を忘れてはいけない。決して昔を懐かしむために来たわけではないのだ。

「立ち退き期限を延ばしてくれという話か」

高史は嘲るように言った。そんなふうに言われると、今までの少し和やかだった雰囲気は壊れてしまう。莉奈は残念に思ったものの仕方がない。このまま旧交を温めて、さようならと帰るわけにはいかないのだ。

高史は莉奈の横に腰かけた。当然、向かい側に腰を下ろして、話を聞いてくれると思ったのに、どうして隣なのだろう。彼の体温まで意識してしまいそうになって、莉奈は落ち着かなかった。

「そうよ。確かにあの家はもうあなたのものだわ。でも、父があなたに売ったときは事情が変わったの」

「君のお父さんは脳梗塞で倒れて、手術をし、今は退院したが、自宅療養中である……だろ？」

莉奈は驚いて、隣に座る彼の顔を見つめた。彼は厳しい表情で彼女を見つめ返している。

「知っていて、私達を追い出そうとするの？ あなたはそこまで冷酷なの？ 本当にひどい人ね！」  
「口に気をつけるがいい。君の家族の窮状を救えるのは僕なんだ、もう少し言い方というものがあるだろう？」

確かに彼の言うとおりだ。莉奈は唇を噛み締めた。

「……ごめんさい。でも、今は本当に行くところがないの。手術代や入院費や治療費がかかって……まだリハビリもしなくちゃいけないし。父は少しでも資金を調達するために、いつの間にか自分の保険まで解約していたの。だから……とにかく、もう少しだけでも待って。私が働いて、住むところを確保できたらすぐに出ていくから」

本当はあの家から出ていきたくない。家族にとって、長い間過ごしてきた家であるし、莉奈にと

っては生まれ育った場所でもある。けれども、父があの家を売り払ったのは事実なのだ。法的に出ていかざるを得ない。

「君が働いて？ どこで働くにしろ、大した金にはならないだろう」

「それは……なんとかするわ」

キャバクラで働いて、本当になんとかかなるのか判らないが、普通の会社で働いても、なんの資格もない莉奈のもらう給料なんてたかが知れている。

「ソープでも働くか？」

「そんな……！ とんでもないわ！」

そこまで身を落とすつもりはない。そもそも、どんなに生活に困ったとしても、処女の自分にそんな真似ができるとは思わなかった。

「それなら、僕が君を買ってもいい」

高史の瞳がきらりと光った。

「な……なにを言ってるの。冗談じゃないわよ。どうせ……私なんか、あなたの好みでもなんでもないでしょう？」

「そうでもないさ」

高史の手が彼女の首に触れた。その途端、身体に今まで経験したことのない熱い衝撃が走る。

「嘘よ！ 五年前だって、私を子供扱いしていたじゃないの」

「昔と違う。君も大人になった。正直、いい女になったよ。誰が君を女にしたのか知らないが……」

長い髪に手を差し込まれ、優しく撫でられた。莉奈は自分の心臓の音が高史に聞こえるのではないかと思った。身体がカッと熱くなる。彼の手は莉奈の気持ちを今でも高ぶらせることができるようだった。

莉奈は自分のそんな反応が怖かった。彼との仲はもう五年前に終わったことだ。今さら、二人の間になにがあるというのだろう。今、彼は彼女の身体を本気で欲しいと思っっているかもしれないが、それは本当に肉体だけのことだ。そんな相手に身を任せていいはずがない。

彼女は高史の手から逃れようと、肩に手を当てるように押し試みた。だが、彼は手を引くどころか、逆に顔をこちらに近づけてくる。

「やめて！ 私は自分の身体を売ったりしないわ！」

「それしか方法がなくてもか？ 君が身体を開けば、立ち退き期限を延ばしてやってもいい」

それを聞いて、莉奈の手は一瞬力を失う。元々、彼女の目的は立ち退き期限を延ばすことだった。しかし、それと自分の身体を引き換えにはできない。

五年前、彼と恋人同士だと思っていた頃なら、きつと喜んで抱かれただろう。けれども、今はそういうわけにはいかない。処女の戯言だと馬鹿にされてもかまわない。愛する人しかベッドを共にしたくないし、それが正しいことだと信じている。今時、馬鹿だと思われてもかまわない。

「ダメ……ダメよ、そんなこと……。できない」

「なぜだ？ 君は家族を守りたいんだらう？ ベッドに行くくらい容易いことじゃないか」

こちらの弱味を突いて、彼女を抱こうとする高史はあまりにも卑劣だ。そんな男に抱かれるのは

真つ平だった。たとえ、彼の顔が近くにあつて、鼓動が速くなつたとしても、それはなにかの間違いだ。自分は彼にときめいたりしてはいない。

「ほかの男には身体を許しても……僕にはダメなのか？」

高史の顔が近すぎて、莉奈は目を開けていられなくなる。彼を押しやろうとする手に、力はもう入らない。彼の息が唇にかかっている。キスされる……と思うだけで、身体が小刻みに震えてしまうのだ。

五年前に何度もされたキスのことを思い出す。ほかの男性には誰一人として許さなかった。

そう。彼にしか……

唇になにか柔らかいものが触れる。それが彼の唇だということはすぐに判った。

ダメ……ダメなのに……

莉奈は彼を拒絶することができなかった。五年前から、自分はこの瞬間を待っていたのかもしれない。そう思えるくらい、身体に力が入らなかった。舌がするりと差し込まれると、全身が燃えるように熱くなる。

彼の婚約者のことや騙されたこと、それから父の会社を奪われ、容赦なく追いつめられたことを思い出そうとしたが、頭の中を全部通り過ぎてしまう。しっかりと抱き締められ、キスをされることだけが、今の彼女にとって重要なことだった。

高史の舌が莉奈の舌に絡んでくる。五年前はこんなに情熱的なキスはしてこなかった。あのときは、どこか人目のないところで、ほんの少し唇を触れ合わせるだけだったのだ。

これが本当のキスなんだわ……

今さらながら、莉奈はそう思った。今まで私はなにも知らなかった。あのときはまだ子供に過ぎなかったのだ。なにも知らず、彼を王子様のように崇めていた。夢中になっていた。

二十四歳になって、自分は少しくらい男性のことを知っているつもりになっていたが、実際にはそうではなかった。こんなふうにキスをすることも、それによって身体がこんなに熱くなることも知らなかった。

彼の手が肩から背中へと移動していく。そして、腰に触れられた。

「んっ……」

陶然としながらも、彼女は彼の手の動きを意識していた。腰を撫でられて、身体が震える。こんな親密なことをしたのは初めてだった。下半身が蕩けてしまったように力が入らない。彼の手を拒まなければならぬのに、どうしてもそれができなかった。

自分の身体なのに、自分でコントロールできない。しかし、それで焦る気持ちよりも、彼にキスをされて触れられる心地よさのほうが大きかった。

彼の手が太腿を撫で、スカートの裾をめぐっていく。そして、服の上からではなく、直に敏感な内腿に触れられて、莉奈は動揺した。

ストッキングを脱いでもう一つのこと悔やまれる。素肌に触れられて、平気でなんかいられない。彼がもう少し手を奥に差し込めば、純白の下着に包まれた場所がある。そう思うだけで、莉奈の下腹部は熱を持った。

今まで男性に触れたことのない場所……

誰一人として、触れるのを許したことのない場所だ。

抵抗すべきだと判っている。自分は金で買われるわけにはいかないのだから、触れることすら許してはいけない。

莉奈は必死で脚を閉じようとした。が、彼の手を挟んでしまっている。それに気がついて太腿をわずかに開くと、その隙を狙ったように彼の手が奥のほうへと侵入してきた。

「あっ……」

いつの間にか唇は離れていた。それに気がつかないほど、莉奈の意識は太腿の間に集中していたのだ。

指が下着越しに大事なところに触れている。まるで、くすぐるようなタッチで触れられて、莉奈は身体の奥から熱い感覚が突き上げてくるのが判った。

「ダメ……っ。触らないで」

「どうしてだ？ 嫌がってなんかいないくせに」

高史の指摘は的を射ていた。口では嫌だと言いながらも、莉奈の身体は決して嫌がってはいない。それどころか、喜んで彼のもたらししてくれるものを受け取ろうとしている。

莉奈は愕然とした。そんなつもりはなかったのに、どうして自分の身体が思うとおりにならぬのだろうか。

薄い下着の上から、彼の指が花卉をなぞるようにゆっくりと動いている。突然、もつと触れてほ

しいという想いが込み上げてきて、どうにもならなくなる。これが欲望なのだろうか。下着越しでは足りない。直に彼の指を感じたい。

それがなにを引き起こすのか、まったく経験のない莉奈にも判<sup>わか</sup>っている。それが自分のプライドを打ち崩すことも、彼の復讐を完成させることも判<sup>わか</sup>っているのだ。

だが、小さなプライドなど、今さら、守る価値もない。どうせ粉々に砕け散っている。会社も家も奪われて、金銭的にも困っている。これ以上、なにを守ろうというのだろう。

貞操……？

馬鹿馬鹿しい。

いや、莉奈にとつては馬鹿馬鹿しくなかったが、世間の人にとつては、二十四歳にもなつて後生大事に取っているものではないだろう。

どうせ、捨てるもの。ここで捨てたところで、どうってことはない。

五年前に恋した相手に奪われるのも悪くはないだろう。なぜなら、莉奈が好きになった男性は、今のところ高史ひとりだから。

懸命に忘れようと努力した。けれども、キスされただけで、ほんの少し触れられただけで、自分の身体は欲望に震えている。だったら、欲しいものを与えてもらえばいいだけの話だ。

高史は莉奈をソファの上に押し倒した。彼の息遣いが荒い。とても興奮しているのが判る。けれども、莉奈自身もほかのことが考えられないくらい興奮していた。

彼の指がもっと大胆にその部分に押しつけられる。下着が邪魔だと思えてくる。そんな自分がと

ても淫<sup>みだ</sup>らになったような気がして、思わずそれを口に出していた。

「ああ、ダメ……こんなの……」

「下着がこんなに濡れているのに？ 君が僕を欲しがっている証拠じゃないか」

「でもっ……」

実際、自分のそこには蜜が溢れていて、トロトロになってるのが判る。それを否定しても無駄なことも。だが、それを彼に指摘されるのは恥ずかしかった。

「これ以上、下着を濡らすわけにいかないね」

指がそこから離れたので、彼が考え直して、もうやめるのだと思つた。莉奈はほっとしつつも、心のどこかで落胆した。もつと感じていたかかったのに。

しかし、彼は莉奈の小さな下着を腰のところで掴<sup>つか</sup>むと、それを引き下ろしていく。まるで、不要なものを筆<sup>ひ</sup>り取られているようだった。丸まった下着が足首から外されていくときも、その下着が放り投げられたときも、莉奈は抵抗しなかった。

莉奈は大きく息を吸って、自分の顔の近くにある高史の顔を見つめた。彼の眼差しはこんなときなのに、とても優しく見えた。五年前のあの頃のように。

自分はスーツを着ているのに、スカートの下はなにも身につけていない。こんな淫<sup>みだ</sup>らな格好をしているのに、彼はティーンだった頃の莉奈を見るときのような眼差しをしている。

「これじゃ……嫌だわ」

掠<sup>かす</sup>れた声<sup>こゑ</sup>が甘く響く。高史は軽く口づけをすると、身を起こし、莉奈のジャケットに手をかけた。

それを脱がせて、白いブラウスのボタンを外しにかかる。莉奈は彼の手によって、すべてを露にされようとしていた。

どうして、私は抵抗しないの……？

それは、自分がまだ高史を欲しがっていたからだ。五年前のあの頃からずっと。

忘れようとしても、完全に忘れることができなかった。彼より素敵だと思う男性には出会わなかったし、彼以上に恋した相手もない。いや、それより大事なことは、莉奈の心の中にはずっと彼がいたことだ。

なんてこと……！

彼は私を傷つけようしているのよ。

しかし、彼の顔を見ていると、そんなふうには思えない。少なくとも今は、復讐を企んでいるようには見えなかった。

ブラウスを脱がされ、白いレースのついたブラを外される。莉奈は彼の目の前に二つの丸い乳房を晒していた。薔薇色の薔が彼の愛撫によって尖っている。

莉奈は彼に見つめられて、思わず手でそこを隠そうとした。

「ダメだ」

静かに否定されて、莉奈はそれに従った。彼が食い入るように見つめているのが、恥ずかしいのになぜだか嬉しかった。興味もなにもないという態度だったら、きつと悲しかったに違いない。

高史は最後の砦であるスカートも筆<sup>むし</sup>り取った。すべてが放り投げられて、フロアリングの床に落

ちている。

とうとう、莉奈はすべてを晒した。

信じられない。少し前までは、こんなことになるとは思いませんでした。

「莉奈……綺麗だ」

まさか、そんなふうには囁かれるなんて。

莉奈は高史に熱い眼差しで見つめられて、身体がぞくぞくしてくるのを感じた。とても恥ずかしいのに、彼にずっと見つめられていたような変な気持ちになる。彼がもつと冷静な目をしていたら、こんなふうには思わなかったかもしれない。

再会したときのように傲慢な目つきのままだったら、いくらキスが上手かったとしても、絶対にこんな真似はしなかった。

恋人同士だった頃を思い出す。彼はいつだって優しくかったし、莉奈を大事にしてくれた。もちろん、それは全部、彼の嘘だったわけだが、今はそんなことも頭の隅に押しやられてしまっている。

彼が嘘つきだということは知っている。けれども、こうして自分の裸体を彼が崇めるように見つけめ賞賛してくれるのは、単純に嬉しかった。

もう、私は彼の興味を惹かない小娘ではないんだわ。

あの美しい婚約者くらいの魅力があるだろうか。見かけだけでも、大人の女でいたい。かつて恋していた彼に抱かれることは、きつとそんなに難しくない。ただ、このまま身を任せていればいいだけだ。

鼓動が速い。自分は確かにこれからのことに期待している。彼がもつと身体に触れてくれることに。高史はスーツの上を脱ぎ、ネクタイを外した。そして、白いワイシャツを脱いでいく。そのどれもが、自分のときと同じように床へと投げ捨てられていく。

彼の裸の上半身を、莉奈はうっとり見つめた。恋していた頃は、こんな姿を見ることもなかった。彼の上半身は引き締まっていて、とても美しかった。彼の肉体こそ綺麗だと賞賛されてもいいくらいだ。

もちろん、莉奈はそんなことを口にするつもりはない。しかし、自分の眼差しは間違いなく本音を語っているだろう。

ああ、彼に触れたい。

だが、そんなことは言えないし、自分から触れることもできない。臆病なのかもしれないが、こんなことは初めてなのだ。どう振る舞っていいのか判らない。

「莉奈……」

高史はもう一度、彼女の名前を囁くと、そつと片方の乳房を手で包んだ。もちろん、誰にも触れられたことのない場所だ。彼女は思わず身体を震わせた。

彼は莉奈に覆いかぶさるようにして、首筋にキスをする。そして、そのまま唇を這わせていった。その間にも彼の手は柔らかく乳房を包み込み、すっかり敏感になっている頂を指でなぞっていく。たった、それだけのことなのに、莉奈の脈は速くなってくる。興奮しているのだと、自分でも判った。初めての経験なのだから無理もない。相手が高史だからとは、思いたくなかった。けれども、

誰が相手でも、こんなふうになるとは思わない。

彼の唇が指で撫でていた乳首に触れた。

「や……っ」

押し殺した声が、まるでねだっているようにも聞こえる。もつとしてほしいと、彼に言っているようだ。

そこが柔らかい唇に包まれて、莉奈はどうしていいか判らなくなった。温かい舌が絡んできて、甘い疼きを感じる。莉奈は目を閉じて、すすり泣くような声を出した。

「君は……感じやすいんだね」

高史の低い声が莉奈をもつと昂ぶらせる。胸にキスされたくらいで、どうしてこんなふうになつてしまうのか、自分でも判らなかつた。

感じやすいから……？ そうなの？

彼がまた乳首を口に含む。舌で転がすように愛撫されて、莉奈はまた自分を見失ってしまった。疼きは治まらず、もつと大きくなっていく。それをどうやって宥めたらいいのだろう。そのうちに、彼の手はさらに下のほうへと伸びていった。

莉奈は身体をビクンと大きく震わせた。高史の手は彼女の太腿を撫で、その間へと差し込まれた。そこがさつきより潤っているのが、自分でも判る。繊細な手つきで花弁に触れられ、莉奈は目を見開いた。

彼の手が自分の大事なところに直に触れている。眩暈がしそうだった。指がそつと内部へと入る

うとしている。思わず彼を押しつけようとしたが、乳首を吸われる感覚に、手の力が抜けてしまう。「ああ……」

指が一本だけ中へと差し入れられた。莉奈は拒絶の言葉を口にする前に、甘い吐息を出していた。自分の身体の中に、別の意思を持つものが入り込んで、蠢うごめいている。こんな感覚を味わったのは、生まれて初めてだった。

怖い。けれども、同時に胸の内に込み上げてくるものがある。嫌悪感ではなかった。喜びに近いもののようにも思える。

「あ……やだ」

彼の唇が胸から離れて、下のほうへと下がってくる。お腹を通り過ぎ、腰骨の内側辺りまでキスをされる。彼の意図は明白だった。

「ダメ……っ」

莉奈は脚を閉じようとしたが、すでにそこには彼の手があり、無理だった。指が引き抜かれ、その代わりに太腿に手をかけられて左右に広げられる。

彼の目の前になにもかも晒している。大事なところも、そこから蜜が溢れ出しているところも。視線を感じるものの、莉奈はとも彼のほうを見ることができずに、ぎゅっと目を閉じた。恥ずかしいという感覚はすでに超えてしまっている。どうしたらいいのか判わからない。彼に広げられた太腿がぶるぶる震えていた。

ふと、彼の息を腿の内側に感じた。

「いやっ……やめて！」

太腿に力を入れて閉じようとしたが、それより太腿を広げようとする彼の力のほうが強かった。さつきよりさらに大きく脚を広げられ、彼はその狭間に顔を埋めた。

「ああ……」

大事な部分に彼の舌を感じる。指よりもっと優しい感触だった。その全体の形を確かめるように舌がなぞっていく。

莉奈は自分がされていることが信じられなかった。知識として知っていることでも、実際にされるのでは違う。しかも、ほかの誰でもなく、高史に舐められているのだと思うと、心は乱れた。

こんなことまで許しているなんて……

セックスそのものより、もっと親密な行為だと思う。彼の唇が、舌が、息がそこに触れていて、莉奈は身体を小さく震わせた。もう、なにもかもが蕩とろけていく。このまま彼のするがままになっってしまうかった。

ふと、彼の舌が蜜壺から花芯に向かって舐め上げてきた。

「えっ……やっ……っ！」

莉奈は目を見開いた。

な、なに……？ これ……！

甘い感覚が一転して、強烈なものとなる。莉奈は耐えられず、身体をガクガクと震わせた。彼の舌が敏感な花芯を舐めるたびに、身体の中に嵐が吹き荒れる。